

からは、宇喜多期の石垣が発見され、現在それらを間近に見ることができよう整備が行われています。

津山城は、時期差を持たない埋没石垣の代表的な事例です。森忠政が慶長6年から元和2年まで築城した城で、元和元年の武家諸法度によって、築城が停止されたと言われています。はじめ、埋没石垣など無いだろうと思っていたのですが、忠政一代の築城期間に、本丸の天守台周辺では、現役の石垣内部に少なくとも3回以上の設計変更と思われる埋没石垣が発見されています。

パネルディスカッション

司 会 山上雅弘（兵庫県立考古博物館）
パネラー 中井均・松田直則・平岡正宏・細田隆博
会場報告 佐伯純也（財団法人 米子市教育文化事業団）
西尾克己（島根県古代文化センター）
西尾孝昌（但馬考古学研究会）
廣瀬岳志（宇和島市教育委員会）

（山上）現在、私たちが目にする近世城郭は、江戸時代の初めに一気に築かれて、そのままの姿で維持されてきたものではありません。段階的に改修を受けた可能性が大きいと思います。これは、どういう背景で起こっているのでしょうか。この点を考えてみたいと思います。既にヒントとして中井先生が御殿について言及されましたが、それぞれの城郭で藩主の御殿はどこにあったのでしょうか。まずこの点から話を進めたいと思います。

（細田）鳥取城は、元和年間の池田光政期に32万石の居城として再整備されますが、江戸時代中頃まで御殿は二ノ丸でした。それが江戸時代中頃以降、三ノ丸に移ります。

（山上）近世城郭というと、藩主は天守のある本丸の御殿に住んで、二ノ丸や三ノ丸は本丸の付属的な施設があったと、多くの人がイメージするのではないのでしょうか。しかし、鳥取城では二ノ丸や三ノ丸の御殿に藩主が住んでいたといえます。それでは本丸はどのように使われていたのでしょうか。

（細田）本丸は久松山（標高263m）の山頂になります。ここには、天守がありましたが、藩主は生活していません。本丸は、天守がある象徴的な空間であったと言えます。

（山上）米子城、高知城はどうでしょうか？

（佐伯）米子城は、戦国時代の終わりに吉川広家が築城を開始し、関ヶ原合戦後の中村氏の段階に完成したと考えられています。その段階に城主がどこに住んでいたのか判然としません。ただ、現状では米子城の本丸に天守以外の大規模な建物があった形跡はありませんので、やはり山麓の二ノ丸や三ノ丸に住んでいたと思います。

（松田）藩主の居住は基本的に二ノ丸の御殿でした。本丸には天守と正殿という建物がありました。これらは高知城の大半が焼失した享保12年の大火後、古相のまま再建しますので、やはり象徴的な役割があったのではないかと考えています。

（山上）ところで、これとは反対に岡山城や津山城では、藩主は本丸に住んでいます。特に岡山城は慶長から元和年間にかけて本丸がどんどん拡張します。それはなぜですか。

(平岡) 確かに岡山城でも津山城でも江戸時代を通じて本丸の御殿で藩主は生活しています。岡山城の場合ですと、御殿の拡張が原因で、本丸が拡張されたと言えます。元和年間に拡張された本丸中ノ段には敷地一杯に御殿が建っていました。

(山上) 姫路城は、池田輝政が慶長6年から築城を開始しますが、池田期の御殿は今の天守台南側の備前丸という場所にありました。この御殿が池田期の政庁で居住空間でした。元和3年に本多家が入りますが、実はこの時、城が拡張されます。これに伴って備前丸にあった御殿も三ノ丸へ移ります。三ノ丸西側の御居城と呼ばれた部分に藩主の居所があり、今の三ノ丸に政庁的な建物がありました。三ノ丸は備前丸に比べると圧倒的に広い場所です。こうした事例から見ると、近世城郭が改修される大きな要因に御殿機能の拡張が挙げられるのではないのでしょうか。単に、藩主の住まいというだけではなく、藩政機構が確立してくると、御殿は様々な役所的な機能も加わっていく。こうした御殿機能の拡張が、より広い敷地を求めて、城が造成され、御殿が移っていくということが指摘できると思います。

松江城や出石城、宇和島城ではどうでしょう。

(西尾克) 松江城は、堀尾吉晴により慶長12年から16年にかけて築城されました。堀尾期段階には最初、天守の南に御殿があったと言われています。やがて、二ノ丸へ移ったようです。そして、松平期になると麓の三ノ丸(現在の県庁がある場所)が御殿となります。

(西尾孝) 出石城は、山麓に鳥取城の天球丸と同じような稲荷曲輪があります。その下段に本丸、二ノ丸が続きます。小出期には本丸に御殿があったようです。しかし、松平期になると三ノ丸を拡張して、御殿を移転します。

(廣瀬) 宇和島城は、慶長元年から慶長6年にかけて藤堂高虎が近世城郭化をはかり、元和元年には伊達政宗の長庶子秀宗が入城します。いずれの時期も、山裾の三之丸に御殿がありましたが、宇和島伊達家の二代藩主宗利が寛文4年から11年にかけて城の大改修を行い、その一環で御殿が三之丸から500mほど南の外堀外の臨海地へと移され、「御浜御殿」と称されるようになります。旧御殿はしばらく側室の休息所等に利用されますが、幕末には取り壊されてしまいます。

(山上) 松江城は、平山城部分の本丸や二ノ丸にあった御殿が、平野部の三ノ丸に移っていく。出石城も高いところから下りて行く。宇和島城に至っては、城の外まで移っていく。

江戸時代を通じて本丸でお殿様が生活するということは、岡山城や津山城のような事例で確認できます。しかし、これまでの話で本丸に住まない藩主も沢山いるということがわかります。しかも城の中心から外側へ向けて住まいを移しています。一方で、この時代は武家諸法度で城郭に関するものは規制がかかっている。藩主の御殿移転と武家諸法度における規制の関係に関して中井先生いかがでしょうか。

(中井) これまでの議論を聞いていますと、御殿の移転や造営には武家諸法度による規制はかかっていないと考えざるを得ません。それは御殿が軍事的な施設ではなかったからだと言えます。しかし、各城郭の例えば詰の丸は築城期以降の姿を留めていますので、軍事的な部分に関しては規制がかかっています。城郭における御殿の変遷を概観すると、城が持つ機能というものが軍事的な空間から武家儀礼の空間になっていくということが指摘できると思います。

本丸が狭いということは、本丸は詰の丸で軍事的な機能を担ったからでしょう。姫路城の備前丸は藩主とその家族が住むには十分だと思いますが、藩政機能が確立した段階では、儀礼の場としては狭い。これは彦根城でも同じです。もともと慶長から元和年間にかけては、今の国宝天守の前に御殿がありました。それが大坂夏の陣が終わった段階で、山麓部分に移ります。住むだけではなくて、藩政機能が固まってくると狭い

から移るという視点は興味深いですが、それに加えて慶長から元和年間は、大坂城には豊臣家が存続していて軍事的な緊張感があり、本丸に住む。それが平和な段階になって役所としての御殿として面積がかなり必要となってくる。これが御殿移転の背景としてイメージできるのではないかなと思いました。

(山上) さて、近年、各地で石垣解体修理が行われており、近世城郭における調査において石垣研究が重要であると言えますので、最後に埋没石垣に触れて終わりたいと思います。鳥取城の場合ですと、天球丸で埋没石垣が出ていますが、現在の形になったのはいつの段階なのでしょう。

(細田) 天球丸では石垣解体修理に伴って埋没石垣が検出されています。埋没石垣を埋め立てた土、つまり現在の曲輪の造成土から、砂目積みの唐津焼の皿が出土していますので、現状の天球丸の構築時期は関ヶ原合戦の直後ではなくて、それより若干下ります。そう考えると、最大の画期は鳥取城が6万石の城から32万石の城へと変わる池田光政が鳥取城主となる元和3年頃と思われます。実は岡山大学にはこれを裏付ける池田光政の普請計画図も残されています。

(山上) 最終的に拡張された段階が池田光政の元和期ということですね。では、大きく造成される前の段階というのはいつの段階なのでしょう。

(細田) 基本的に池田長吉段階と考えられます。鳥取城では通説的に近世城郭は池田長吉の時代に築かれたと信じられてきましたが、明らかに考え直さなければなりません。

(山上) 高知城や津山城の埋没石垣についてはどうなのでしょう。

(松田) 高知城の三ノ丸で出土した埋没石垣は長宗我部段階のものです。高知城では本丸と二ノ丸は慶長8年に築かれて、三ノ丸は慶長16年の段階に築かれました。そして今まで三ノ丸に関しては、それ以前は曲輪が無かったと理解されていたのです。しかし、実際は、長宗我部段階に石垣をもった曲輪があったということです。

(平岡) 津山城は、発掘で確認された拡張の痕跡は天守台周囲に限られます。森忠政は津山城の普請中から本丸御殿にいたと記録されています。従って、津山城では本丸に御殿を確保した上で天守や櫓等を整備したと言えます。天守台周辺から次々と検出された埋没石垣は、御殿が既に整備されていたために、新たな敷地を確保しようとして随時拡張が行われたのではないかと考えています。

(中井) 鳥取城の話をして頂くと、天球丸の埋没石垣は、私のイメージでは山上ノ丸にある宮部継潤が築いた天正年間の石垣と似ていると思います。これはあくまで印象の話です…。いずれにせよ、宮部継潤が鳥取に来た時に、山麓にも軍事的な拠点を造っていると思います。その最適地は、今の二ノ丸や三ノ丸以上に天球丸の辺りではないかと思っています。山頂部分と二ノ丸や三ノ丸部分を造って、中腹に近い天球丸を、天球院さんが来たからといって最初から造り始めるということは理解できません。ですから元々なんらかの施設が後の天球丸にあって、それを元和年間にかけて拡張していると考えた方がいいと思います。これは埋没石垣の存在によって、裏付けられます。

近世城郭はこれまで文献や建築分野を中心に語られてきた面があります。戦国時代の城郭に関しては考古学的な研究が確立されてきましたが、近世城郭においても適応できるでしょう。特に、これまで御殿空間は建築分野で議論されていたと思うのですが、今回の城館調査検討会によって、考古学の分野からも議論の切り口が示せたということが大きな成果であったのではないかと思います。

